



遠い世界



川崎ゆきお

薄暗い洞窟の中で格闘していた。

と、角田は語りだした。

「あんなメジャーな場所にいらっしゃったのにはですか」

「遠いところにいたように、今は思えるよ。かなり遠方だ。もう二度と行けないような場所だな。行こうと思えば行けるかもしれないが、もうその気はない。あれは勢いでそこまで行ってしまったんだろうねえ。そして辿り着いたところは洞窟のように狭い場所でね。その突き当たりの、さらに狭いところで格闘していたよ。今は平原に出てきた感じかな。広い場所にね」

「角田さんはトップクラスで、何年も最先端にいましたねえ。角田王国と呼ばれていましたよ。頂上ですよ。頂点ですよ。上はもう誰もいない。下を見れば、見晴らしがよかったんじゃないのですか」

「地の底にいたんだよ。実際はね」

「最先端の宇宙船もそうでしょ。宇宙飛行士は結構狭い場所にいますよね」

「ああ、それに似ているねえ」

「そうですか」

「そこにはねえ、自由に動けるような場所は何処にもなかったんだ。身動き一つ出来ないほど、窮屈で狭い」

「しかし、今は……」

「もうその仕事を辞めたので、やっと広い世界に出てこれたよ。こうして、町を歩いているだけでも幸せだよ。どうしてあんな遠くまで行ってたんだろうねえ。良いことなんて、あまりなかったのに」

「栄光の日々だったんじゃないのですか」

「栄光か。それはねえ。本人はそんなこと喜んでる場合じゃないんだ。そんな暇もなかったよ」

「あまり後進達に聞かせたくないお話ですねえ」

「ああ、夢も希望も崩してしまうからねえ。登り切っても大したことないんだとね。逆に穴蔵でゴソゴソのたうち回るような日々ではね」

「かなり、否定的なご意見なのですが」

「元々、私は向いていなかったんだ。得意でもなかったしね。それほど好きなことでもない。だからかもしれないねえ」

「それで、辞められてから、やっと本来を取り戻したということでしょうか」

「ああ、あんなところには何もなかったよ。遠いだけでね」

「そうなんですか」

「暗い話になって、申し訳ないねえ」

「いえいえ」

「これは記事にするの」

「一応」

「そうか、じゃ、今のは消して、最初から話すよ」

「あ、はい」

「そこはまるで成層圏から地上を見ているように見晴らしがよく、最高の気分になれる場所だった」

「あのう」

「そう言わないと、記事にならんでしょ」

「はい」

了